

神奈川県障害者自立生活支援センターの鈴木です。

私の住む神奈川県では、4年前、津久井やまゆり園に入所していた方々が襲われ、19人もの尊い生命が奪われ、26人が重軽症を負わされた「相模原障害者殺傷事件」が起きました。

そして今年、事件の犯人である植松被告に対して死刑が確定しています。

裁判では、植松個人の責任能力の有無に焦点が当たり、彼の「重度障害者は不幸しか作れない」、「殺した方が社会の役に立つ」という主張の背景や原因を深く掘り下げることとはできずに結審しています。

神奈川県は、津久井やまゆり園を含む6つの施設における支援の在り方などの検証を行うとしています。

しかし、今日まで、津久井やまゆり園における虐待や不適切な支援についての検証は、曖昧となったままになっています。

津久井やまゆり園の支援検証委員会が出した中間報告では、職員による入所者への暴力や、不適切な支援があったとされ、事件につながった背景のひとつとして報告されています。

また、最近では、同法人が運営する他の施設において、虐待の可能性のあるかもしれないと自治体に通報した職員に対し、「懲戒処分の対象にもなりうる」という文章を職員向けに出し、「極めて不適切」として改善を求められるという事実も出てきました。

これに対し、「職員に向けた内部文書であり公表する考えもなく、質問にも答えない」といった運営側の回答は、新聞記事で黒岩県知事が言っていたように、同法人のガバナンスに問題があることは言うまでもないと思います。

いくら職員個人の実践力が高くても、その職員が所属している組織の健全な法人運営が出来ていなければ、質の高い福祉サービスを提供していくことは難しいのではないのでしょうか。

今、新型コロナウイルスが原因で、権利擁護活動として施設に出向いて面談をする、オ

ンブズマンによる訪問相談会も中止となっている状況です。

虐待や、不適切な支援は、閉ざされた密室で起こります。だからこそ、外からの目を入れて、日常の支援を振り返る機会を持ち、支援のあり方をともに考えていくことが、事態を悪化する前に防止できる有効な手立てであることは間違いありません。

しかし、コロナの影響で、入所している人たちの声は、外部に届きにくくなっています。

今年は、毎年開催してきた津久井やまゆり園の追悼集会も、コロナによって開催が見送られました。

新型コロナウイルス感染症の終息の見通しが立たない中、死刑確定と共に、急速に世間の関心度が低下していると感じています。

私は、神奈川県で生きる一人の人間として、これからも、あの事件を絶対に風化させてはならない、声を上げ続けていかなければならないと、思っています。